

臨海実習における学生の意識と実態に関する調査

—神戸親和女子大学における事例—

Research of consideration and condition in the seaside swimming class:

A case study of the Kobe Shinwa Women's University

加藤大門*・今西平**・宮辻和貴*

KATO Daimon

IMANISHI Taira

MIYATSUJI Kazuki

はじめに

学校教育では「プール指導」があり、また総合学習では水辺に児童・生徒を引率する機会も多く、ある程度泳げることが教員の必須条件になっているため、全国的に教員採用試験で水泳の実技試験が実施されている。文部科学省⁶⁾によると、平成23年度小学校教員採用試験では全国の約9割、56道府県市が「水泳」の実技試験を実施している。

兵庫県・神戸市・大阪府・大阪市の教員採用試験についてみると、兵庫県（小学校）は平泳ぎ25m、神戸市（小学校）はクロール25m、大阪府は小学校が泳法自由25m、中学校・高等学校は平泳ぎ及びそれ以外の1泳法を各25m、大阪市は小学校でクロールまたは平泳ぎから1泳法選択25m、中学校・高等学校ではクロール及び平泳ぎを各25mとなっている。

鹿児島市立松原小学校³⁾は、1926年（大正15年）の第1回桜島・錦江湾横断遠泳大会に参加し、74名全員が4.2kmを2時間35分で完泳、1927年（昭和2年）の第2回大会は130名が2時間55分で完泳、1931年（昭和6年）の第5回大会は105名が2時間17分で完泳している（第3回及び第4回については公式記録なし）。戦後復活した第1回大会1966年（昭和41年）から2010年（平成22年）の第45回大会まで、毎回100名以上の児童が完泳している。また同市立清水小学校は、1917年（大正6年）に第1回錦江湾横断遠泳大会を開催、戦争で中断していたが1982年（昭和57年）から復活している。この鹿児島市の2校以外にも、全国の多くの小・中・高校で遠泳大会が実施されている¹⁰⁾。また、1チーム4名の高校生以上の一般市民を対象にした桜島・錦江湾横断遠泳大会が地元観光有志によって1987年（昭和62年）に復活実施され、2010年（平成22年）で24回目を実施して

いる。

天野ら¹⁾は、茨城キリスト教大学で実施している集中水泳実習における大学生の泳力向上と授業認識に関する一考察を報告している。

神戸親和女子大学でも夏季休暇中に臨海実習を、冬季休暇中にスキー実習を実施している。臨海実習に関しては、灘ら⁷⁾による「教育的効果に関する調査研究」と、宮内ら⁵⁾による「自由記述によるプログラム評価」報告がある。冬季のスキー実習については、宮内⁴⁾と灘・宮内⁸⁾による「意識・実態に関する調査研究」がみられる。また曾和ら⁹⁾は「生涯体育・スポーツへの結びつきについての一考察」を報告している。

神戸親和女子大学恒例の夏季休暇中の臨海実習に関する灘ら⁷⁾による報告から5年が経過したので、今回、2010年実施の夏季集中科目の「水泳」及び「水泳実習」を受講した学生を対象にした意識と実態に関するアンケート調査を実施したので、その分析結果を報告する。

なお、2010年度の臨海実習の様子は地元の伊勢新聞に掲載紹介された（写真1）。

二見浦海水浴場 神戸の女子大生 遠泳挑戦

【伊勢】海水浴客でにぎわう伊勢市二見町の二見浦海水浴場一帯で、十六―十九日の三泊四日で水泳合宿に訪れた神戸親和女子大学（神戸市、山添正学長）の生徒らは十九日、約三キロの遠泳などに挑戦し、体を鍛えた。

強健な心身を養い、自然の中での行動の仕方や自然に親しむ態度を育てることを目標とした野外実習で、四十年以上続く伝統合宿という。発達教育学部の水泳科目などを専攻している一年生百四十人が参加した。

十七、十八日の早朝は、生徒ら全員が海岸を清掃。十九日海の日合宿最終日は、泳力ごとに大遠泳（九十分）、中遠泳（六十分）、小遠泳（三十分）の三班に分かれて実習した。

2010/07/20 10:28 【伊勢新聞】



写真1

調査対象及び方法

1 調査対象

今回の調査では、神戸親和女子大学の夏季集中科目「水泳」及び「水泳実習」を受講した学生141名全員を対象にした。実習最終日に参加学生141名全員にアンケート用紙を配布し、当日回収した。回収は122(回収率86.5%)であった。

参加学生の所属学部・学科の内訳は、「水泳」を受講した学生は発達教育学部・福祉臨床学科(以下「福祉臨床」)の8名、発達教育学部・ジュニアスポーツ教育学科(以下「ジュニアスポーツ」)の82名=計90名(図1)、「水泳実習」を受講した学生は文学部・総合文化学科(以下「総合文化」)の1名、発達教育学部・児童教育学科(以下「児童教育」)の45名、発達教育学部・心理学科(以下「心理」)の5名=計51名(図2)であった。

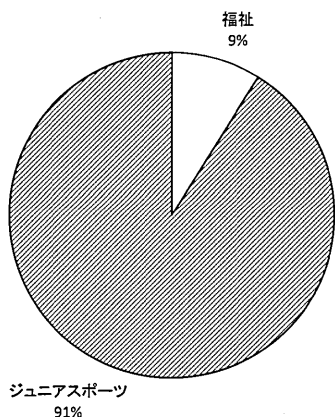


図1 「水泳」科目受講者の所属学科

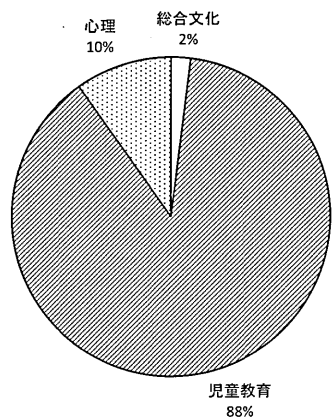


図2 「水泳実習」科目受講者の所属学科

2 班編成

教員が個々の学生の泳力を判定し、「水泳」受講者を上級(1・2・3・4班)、中級(5・6・7班)、初級(8・9班)に配分、「水泳実習」受講者も同様に、上級(1班)、中級(2・3・4班)、初級(5

班)に配分した。

3 実習期間及び実施場所

平成22年7月16日～7月19日の4日間、三重県伊勢市二見町の町営プールと二見浦海岸で実施した。

4 統計処理

集計した回答はパーセント表記で示した。データを比較する群ごとに集計し、 χ 二乗検定にて比率の差を検討した。

データ処理は全てSPSS for Windows version 11.0を用いた。危険率5%未満、および残差分析にて調整済み残差が±2.0以上の項目を有意とした。

結果および考察

1 上級班を占めた学生の所属学科

「水泳」受講の上級班には「ジュニアスポーツ」所属の学生が多く、「水泳実習」受講の上級班には「児童教育」及び「心理」所属の学生が集中していた(図3、4)。「ジュニアスポーツ」、「児童教育」及び「心理」所属に水泳経験者(上級者)が多く見られたのは、将来の「学校体育」における水泳指導を見据えた学生が集まったからだと考えられる。

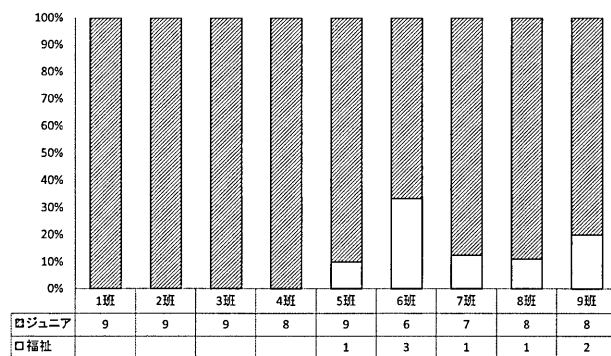


図3 「水泳」科目受講者の班編成

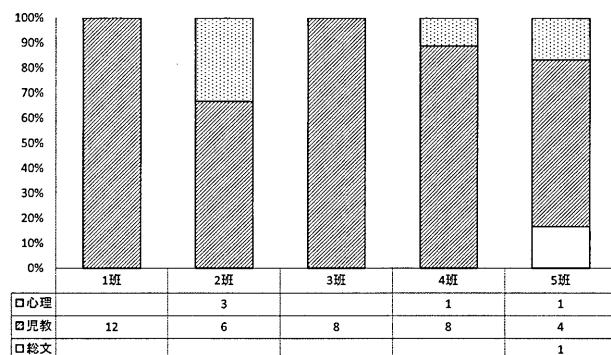


図4 「水泳実習」科目受講者の班編成

2 目標および目標達成度について

自由記載の「目標の設定」については、“遠泳を泳ぎきる”が最も多く、その他には“クロール25mをクリアする”、“水泳を楽しむ”、“水泳の指導法を学ぶ”などの意見が優位を占めていた。

「目標達成度」については、班別に残差分析（調整済み残差）を行なったところ、「水泳」受講者の7班は“半分程度”と回答する者が多く、8班と9班は“90～100%”と回答する者が少なく、特に9班は“10%以下”と回答する者が多かった（図5）。8・9班の「目標達成度」は他の班よりも有意に低かった（ $p < 0.05$ ）。また、「水泳実習」受講者の「目標達成度」の班別残差分析では、5班は“半分程度”と回答する者が多く、“90～100%”と回答する者は少なかった（図6）。こちらも「水泳」受講者と同じように、5班の自己目標の達成率が他の班よりも有意に低いということがいえる（ $p < 0.05$ ）。

これらの結果は、下級班の目標設定が上級班と変わらなかったため、目標設定が高すぎたからと考えられる。

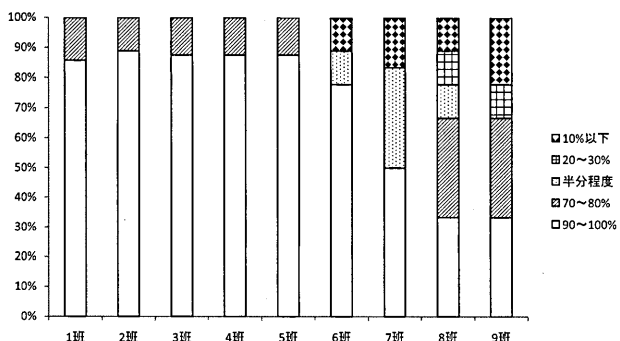


図5 「水泳」科目受講者の「目標達成度」について

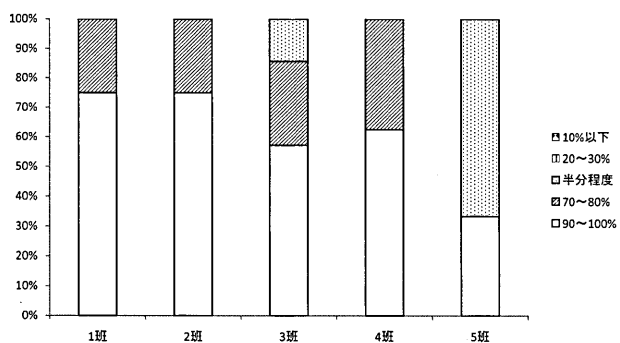


図6 「水泳実習」科目受講者の「目標達成度」について

3 事前説明会及び実習の期間について

「事前説明会」については、ほとんどの学生が現行通りでよいと考えていた。しかし、放課後に質疑応答の時間を設けてほしいと考えている学生も少な

からずいたことがわかった（図7）。今後の事前説明会の参考にしたい。

「実習の期間」については、「水泳」受講者の58.8%、「水泳実習」受講者の78.6%が現行通りの“4日でよい”と答えたが、「水泳」受講者の21.3%が“実習期間を1日延長して5日にし、休息日を中間に1日入れてほしい”と答えた。逆に、「水泳実習」受講者の14.3%は“半分の2日間でよい”と考えていたことがわかった（図8）。「水泳」受講者に対しては前期の通常授業中に半期間の水泳指導があるのに対して、「水泳実習」受講者に対しては事前の水泳指導がなく、臨海実習のみの当日参加であり、所属学科の特性からも水泳の技能習得に対する意識の違いが原因しているものと考えられる。即ち、「水泳」受講者は“泳ぐことを目的”としているのに対して、「水泳実習」受講者は“海水浴（遊び）に行く”程度の軽い参加意識に起因していると思われる。

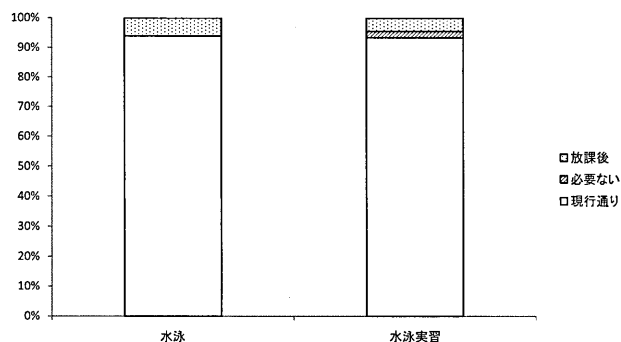


図7 “事前説明会”について

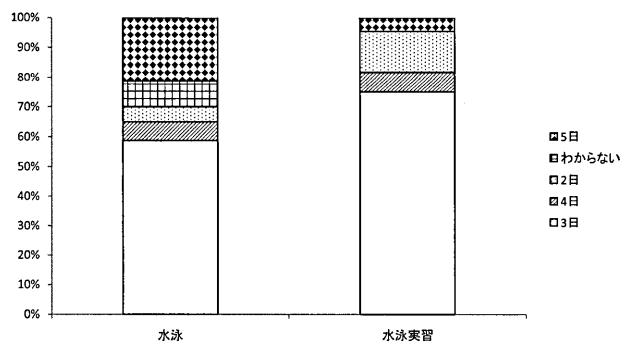


図8 “実習の期間”について

4 実習の内容について

「実習の疲れ」についてみると、ほとんどの班に“疲れがあった”ことがわかった。特に「水泳」受講の8班において、“非常に疲れた”との回答が多くみられた（図9、10）。

「得られたものがどの程度あったか」の問いに対して、ほとんどの学生が“たくさんあった”と答え

た(図11)。具体的に“どのようなものを得たか”が興味深いところではあるが、本研究では詳しく問うていないため、今後の調査で詳細に検討したい。
「他の学生と仲良くなれたか」の問いに対しては、

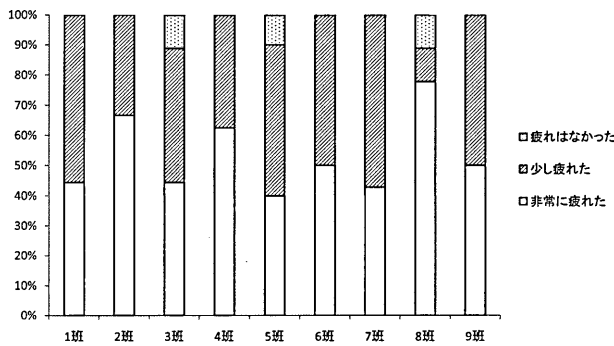


図9 「水泳」受講者の“疲れ”について

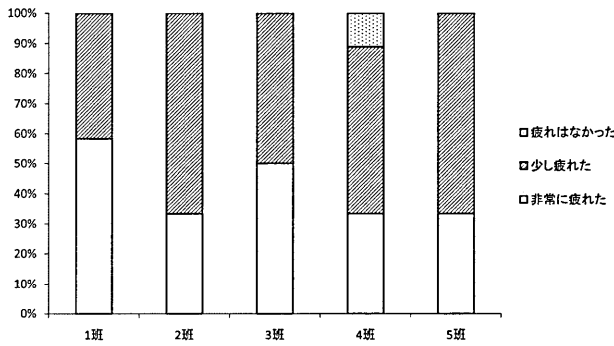


図10 「水泳実習」受講者の“疲れ”について

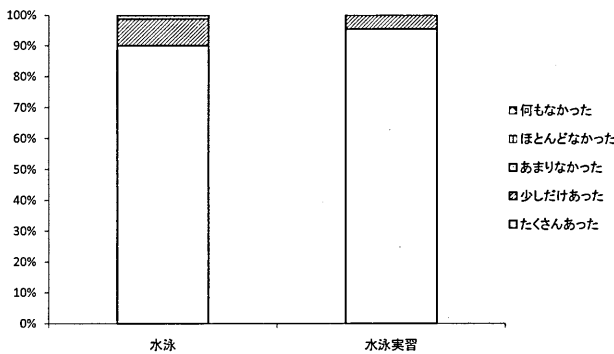


図11 今回の臨海実習で“得られたものはどの程度あったか”について

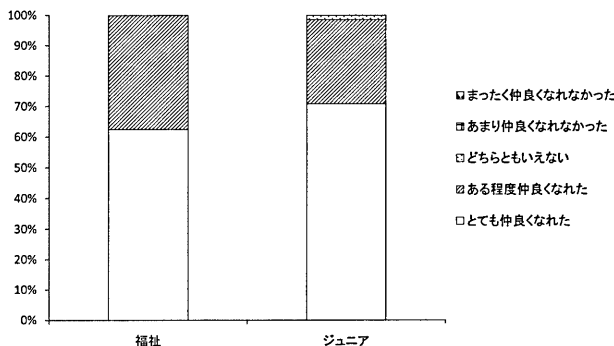


図12 「水泳」科目受講者の“他の学生と仲良くなれたか”について

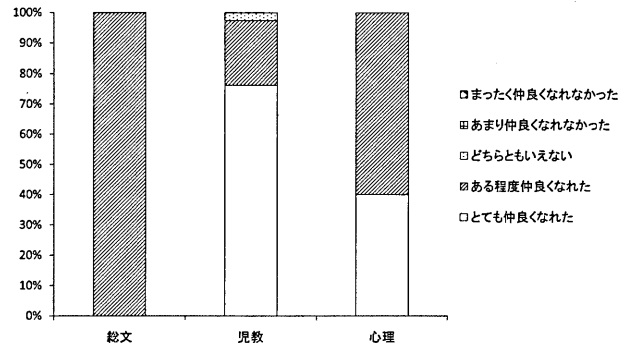


図13 「水泳実習」科目受講者の“他の学生と仲良くなれたか”についてほとんどの学生が“仲良くなれた”と答えた(図12、13)。

これらのことから、臨海実習での疲れはあったものの、他学科との交流や講習内容に満足していたと考えられる。

5 遠泳について

「参加した遠泳」について班別にみると、上級班が長い距離の遠泳に、下級班が短い距離の遠泳に参加したことがわかった(図14、15)。

「遠泳を楽しめたか」の問いに対して、大遠泳に参加した学生は“とても楽しかった”と回答する者が多く、“まあまあ楽しかった”との回答を凌駕していた。小遠泳に参加した学生では、“まあまあ楽し

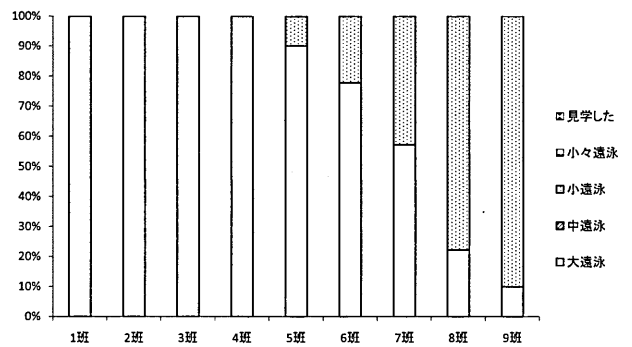


図14 「水泳」科目受講者の“どの遠泳に参加したか”について

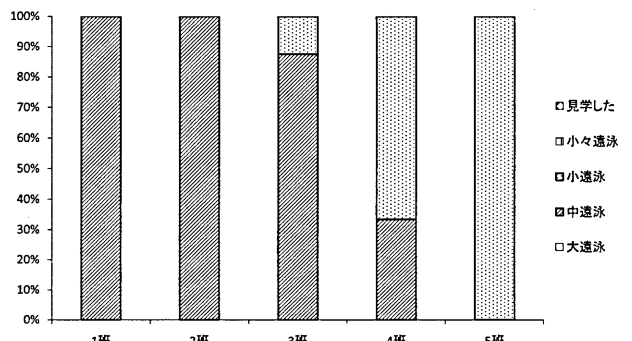


図15 「水泳実習」科目受講者の“どの遠泳に参加したか”について

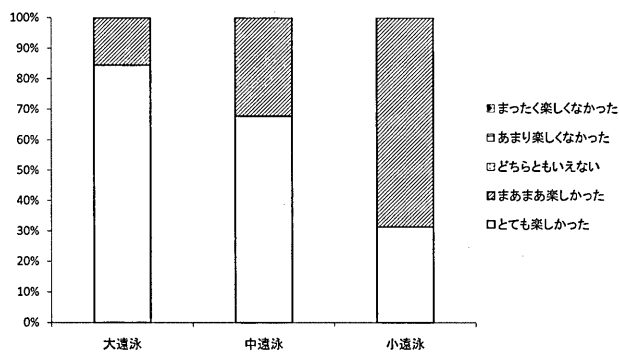


図16 “遠泳を楽しめたか”について

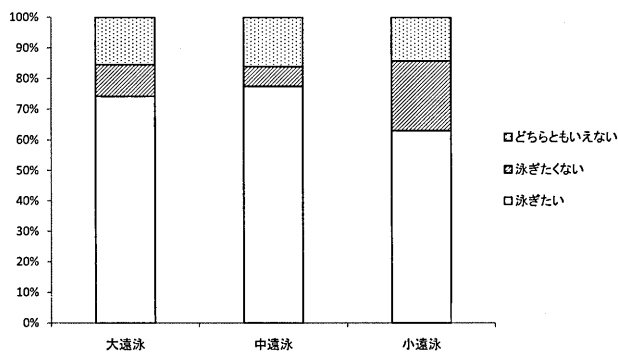


図20 “また海で泳ぎたいか”について

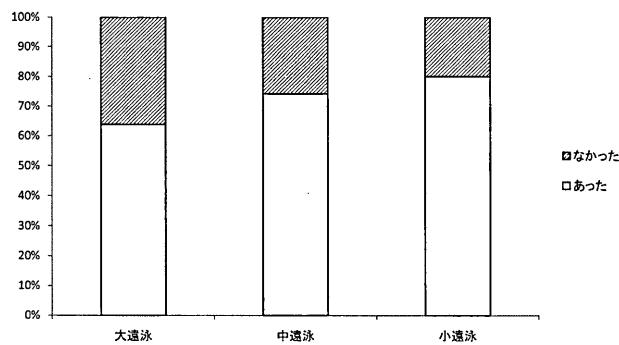


図17 “遠泳中に不安はあったか”について

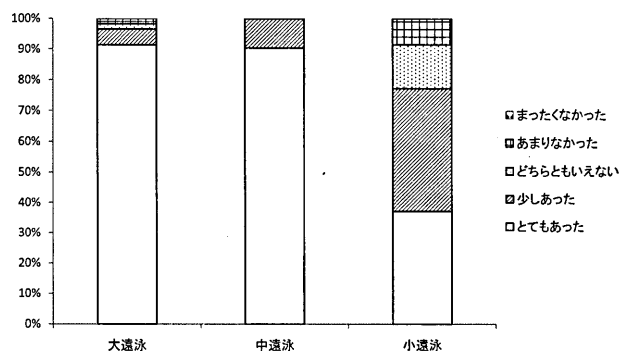


図18 “遠泳の達成感”について

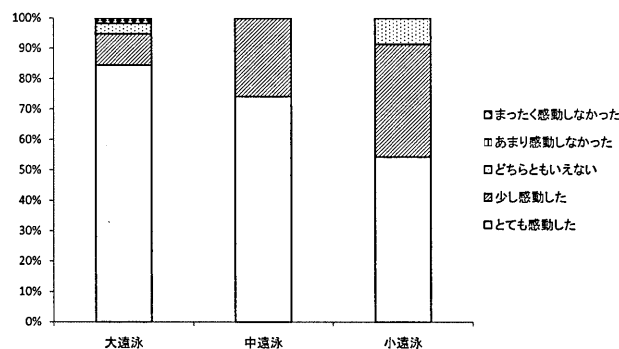


図19 “遠泳の感動”について

かった”と回答する者が多く、“とても楽しかった”と回答する者は少なかった(図16)。「大遠泳に参加」した学生ほど楽しみが大きく、泳力に不安があるため「小遠泳に参加」した学生ほど楽しみは小さかったといえる (p<0.05)。

「不安」については、統計学的な有意性はみられなかった(図17)。

「達成感があったか」についての調査では、大遠泳と中遠泳に参加した学生は、“とてもあった”と回答するものが多かった。小遠泳に参加した学生は、“とてもあった”と回答する者が少なく、“少しあった”、“どちらともいえない”、“あまりなかった”と回答する者が多くみられた(図18)。「楽しめたか」と同様に、大遠泳ほど達成感が高く、小遠泳ほど低いといえる (p<0.05)。

「感動したか」の調査では、大遠泳に参加した学生は“とても感動した”と回答する者が多く、“少し感動した”と回答する者は少なかった。小遠泳に参加した学生は“少し感動した”と回答する者が多く、“とても感動した”と回答する者は少なかった(図19)。

「また海で泳ぎたいか」については、“泳ぎたい”と回答する学生が多く見られたが、小遠泳に参加した学生の中には“泳ぎたくない”と回答する者もかなりいた(図20)。

遠泳はより長く泳ぐことで、「楽しみ」や「達成感」や「感動」がより大きくなることがわかったが、泳力に相応・適合した遠泳距離の選択を指導することで安全に泳ぎきることが容易となり、結果として、長距離遠泳を選択した者と同様に、「楽しみ」や「達成感」や「感動」を共有できることにつながるので、初級者への「小遠泳のための特訓」が必要であると考える。

6 評価について

「先生の指導評価」については、ほとんどの学生が“説明及び指導ともよかった”と答えた(図21、22)。

「学生の自己評価」については、“十分習得できた”、“ある程度習得できた”と答えた学生が多くみられたが、初級班では“不十分だった”と答えた学

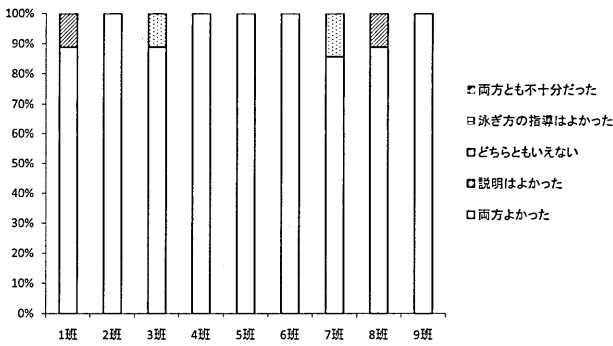


図21 「水泳」受講者の「先生の説明や指導の評価」について

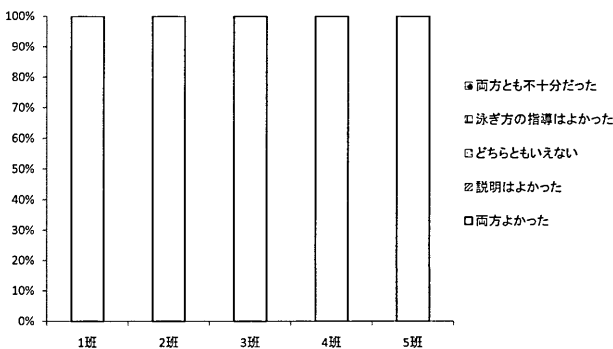


図22 「水泳実習」受講者の「先生の説明や指導の評価」について

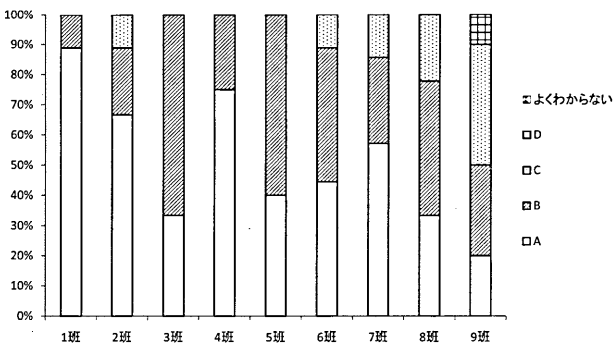


図23 「水泳」科目受講者の「問題意識及び技能習得の自己評価」について

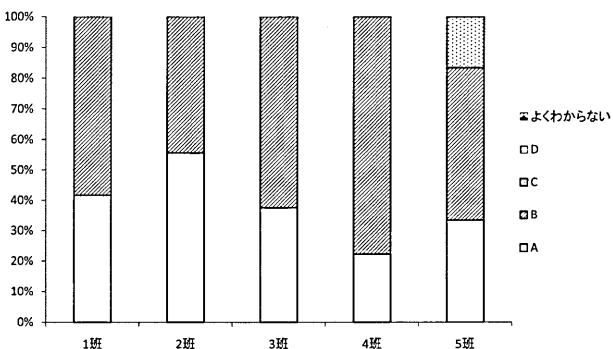


図24 「水泳実習」受講者の「問題意識及び技能習得の自己評価」について

生もみられた (図23、24)。このことから、遠泳の項でも触れたように、初級者に対しては泳力指導に重点を置き、水泳の技術を習得できるよう配慮すべきだと考える。

7 実習を終えてからについて

今後実施を検討している「環境教育・環境学習プログラム」についての問いに対しては、“参加したい”、“どちらともいえない”と答える学生が多く、“参加したくない”と答える学生も少しみられた (図25)。「環境教育・環境学習プログラム」を臨海実習プログラムに加えることになれば、実施内容の十分な説明が必要になる。

また、今回の臨海実習の「経験を伝えたいか」について班別に残差分析を行なったところ、「水泳」受講者については有意な差はみられなかった。一方、「水泳実習」受講者の2班は“とても伝えたい”と回答する者が多くみられたが、4班と5班は“とても伝えたい”と回答する者が少なく、5班は“まあまあ伝えたい”と回答する者が多くみられた (p<0.05)。

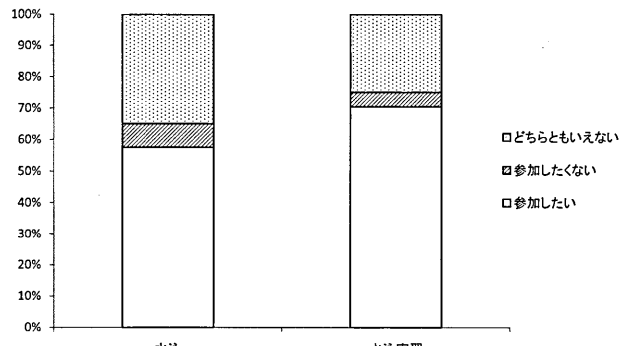


図25 “環境プログラムの参加”について

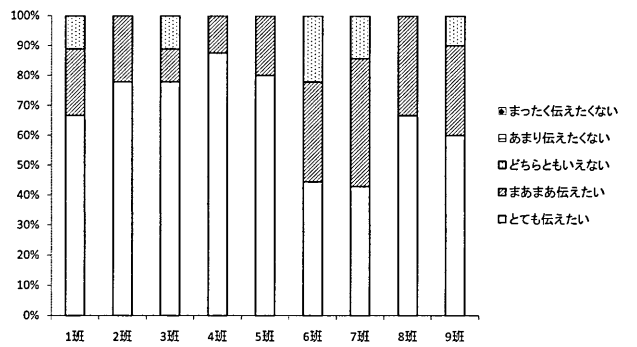


図26 「水泳」科目受講者の「臨海実習の経験を伝えたいか」について

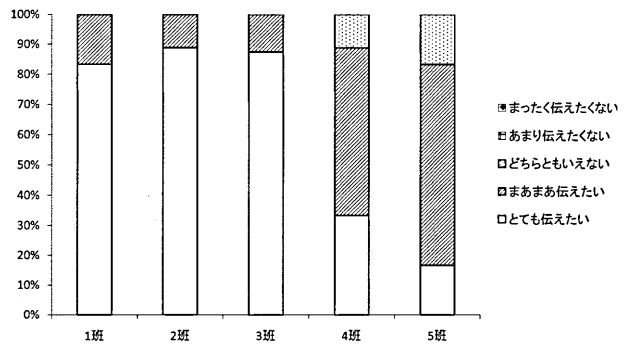


図27 「水泳実習」科目受講者の「臨海実習の経験を伝えたいか」について

なお、4・5班は水泳実習の経験を伝えたいと強く思う者が少ないようだが、全ての班が「伝えたい」とは思っているようだ(図26、27)。

最後に「実習をより良くするための提案」を書いてももらったところ、“花火大会”や“お疲れさま会”など、“お楽しみプログラム”を希望する意見があった。

これらのことから、水泳があまり得意でない者でも楽しめるイベントを取り入れ、実習での経験をより伝えていきたいと思えるようなものにしていくことも必要であると考えられる。

まとめ

神戸親和女子大学の「水泳」受講者及び「水泳実習」受講者に関する意識と実態について調査した結果、以下のように要約される。

1. 目標達成度について班別に残差分析を行なったところ、「水泳」受講者の8、9班及び「水泳実習」受講者の5班が、他の班よりも有意に低いということがわかった ($p < 0.05$)。

これらの結果は、下級班の目標設定が上級班と変わらなかった(高すぎた)ためだったことに起因すると考えられる。

2. 遠泳に関する意識調査では、参加した遠泳別に「楽しみ」「達成感」「感動」に有意性がみられた ($p < 0.05$)。遠泳は、より長く泳ぐことで「楽しみ」「達成感」「感動」はより大きくなることがわかった。しかし、学生の泳力に伴った泳距離を設定することで、安全に完泳することが大切である。

3. 経験を伝えたいかどうかについて班別に残差分析を行なったところ、「水泳実習」受講者の4班と5班は“とても伝えたい”と回答する者が少なく、2班は“とても伝えたい”と回答する者が多くみられた。また5班は“まあまあ伝えたい”と回答する者が多くみられた ($p < 0.05$)。4・5班は水泳実習の経験を伝えたいと強く思う者が少ないようだが、全ての班が「伝えたい」とは思っているようだ。

これらのことから、水泳が得意でない者でも実習での経験をより伝えていきたいと思えるようなものにしていくためのプログラムの工夫が必要かと考える。

以上のことから、目標にする基準は自己の能力に応じたレベルで設定するように勧めると共に、どの遠泳に参加することになっても、「楽しみ」「達成感」「感動」を高いレベルで体験させてやるのが重要である。また、このような実習での経験をもっと伝えていきたいと思わせるようなプログラム内容に改善すべきであると考えられる。

謝辞

本研究は神戸親和女子大学の水泳および水泳実習を企画した教職員の方々の協力により得られたものである。記して感謝の意を表する。

文献

- 1) 天野秀哉、鋤柄純忠、大山康彦(2009):水泳実習における大学生の泳力向上と授業認識に関する一考察—小学校教職課程大学生を対象として—、茨城キリスト教大学紀要(43):203-216
- 2) 藤原有子、星島葉子、田島誠、矢野博己、木村一彦(2002):遠泳実習を目的とした水泳実習における体脂肪率と体温変化との関係、川崎医療福祉学会誌(12)175-179
- 3) 鹿児島市立松原小学校(2011):松原小学校錦江湾横断遠泳の歩み—戦前の記録—、<http://keinet.com/matsubaras/enei3.htm>
- 4) 宮内一三(1995):スキーにおける女子大生の意識・実態に関する調査・研究 第1報—スキー実習参加学生の意識・実態調査より—、神戸親和女子大学 児童教育学研究(14):49-66
- 5) 宮内一三、木谷織信、灘英世、安田忠典、間瀬知紀、千葉英史、三神憲一、井関眞欣(2006)女子大学における水泳実習の授業評価—自由記述によるプログラム評価—、日本体育学会第57回大会予稿集、(57):210
- 6) 文部科学省(2010):平成23年度公立学校教員採用選考試験の実施方法について、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1300238.htm
- 7) 灘英世、木谷織信、津田真一郎、間瀬知紀、宮内一三、安田忠典、井関眞欣(2006):合宿型水泳実習の教育的効果について—女子大学生による水泳実習の授業評価—、身体運動文化論叢(5):67-81
- 8) 灘英世、宮内一三(1995):スキーにおける女子大生の意識・実態に関する調査・研究 第2報—スキーセミナー参加学生の意識・実態調査より—、神戸親和女子大学児童教育研究(14):67-83
- 9) 曾和光代、東條順子、河合信行、河瀬泰治、見正秀基、宮内一三(2005):生涯体育・スポーツへの結びつきについての一考察、神戸親和女子大学 児童教育学研究(13):20-58
- 10) 矢野博己、藤塚千秋、椎葉大輔、藤原有子、米谷正造、木村一彦(2005):全国の小・中学校および高等学校の遠泳実施状況調査、川崎医療福祉学会誌(15)303-308

臨海実習(教科名「水泳」「水泳実習」)アンケート

次回の臨海実習をより良いものにするため、以下の質問について、当てはまる番号に○を付けてください。
また、書き込み事項は枠内に簡単に記入してください。

1. あなたの所属する学部・学科はどこですか

01 文学部・総合文化学科	02 発達教育学部・児童教育学科	03 発達教育学部・心理学科
04 発達教育学部・福祉臨床学科	05 発達教育学部・ジュニアスポーツ教育学科	
2. あなたは何班でしたか

	班
--	---
3. 何を目標にしていましたか

01 簡単に書いてください(例:平泳ぎ25m, 遠泳2kmクリア, 自然とのふれあい, 指導者意識など)
02 目標は決めていなかった
4. 臨海実習に参加して、自己目標はどの程度達成できましたか

01 90~100%程度達成できた	02 70~80%程度達成できた	03 半分程度(40~60%)達成できた
04 達成度は20~30%だった	05 達成度は10%以下だった	
5. 事前説明会＝昼休み20分程度＝についてどう思いますか

01 現行通り(昼休み20分程度)でよい	02 事前説明会は必要ない
03 放課後(1時間程度)にして、質疑応答の時間を設けて欲しい	
6. 臨海実習の期間(日程)についてどう思いますか

01 3日でよい	02 4日にしてほしい	03 2日でよい	04 わからない
05 5日にし、中日(3日目)を休息日にしてほしい			
7. 臨海実習は疲れましたか

01 非常に疲れた	02 少し疲れた	03 ほとんど疲れはなかった
-----------	----------	----------------
8. 得られたものはどの程度ありましたか

01 たくさんあった	02 少しだけあった	03 あまりなかった	04 ほとんどなかった
05 得られるものは何もなかった			
9. 他の学生と仲良くなれましたか

01 とても仲良くなれた	02 ある程度仲良くなれた	03 どちらともいえない
04 あまり仲良くなれなかった		
05 まったく仲良くなれなかった		
10. どの遠泳に参加しましたか

01 大遠泳	02 中遠泳	03 小遠泳	04 小々遠泳
05 体調不良のため遠泳には参加せず見学した			
11. 遠泳を楽しむことが出来ましたか

01 とても楽しかった	02 まあまあ楽しかった	03 どちらともいえない
04 あまり楽しくなかった		
05 まったく楽しくなかった		
12. 遠泳中に不安はありましたか?

01 あった	02 なかった
--------	---------
13. 問12で「あった」と回答した方のみお答え下さい
 遠泳での不安はどのような内容でしたか(複数回答OK)

01 怖かった	02 波があった	03 海水が嫌だった	04 泳力に自信がなかった
05 体調が悪くなった	06 疲れた	07 呼吸が出来なくなった	
08 ペースが乱れた	09 距離が長かった	10 水温が冷たかった	
11 くらげが怖かった	12 その他		

14. 遠泳の達成感がありましたか
01 とてもあった 02 少しあった 03 どちらともいえない 04 あまりなかった
05 まったくなかった
15. 遠泳で感動しましたか
01 とても感動した 02 少し感動した 03 どちらともいえない 04 あまり感動しなかった
05 まったく感動しなかった
16. また海で泳ぎたいですか
01 泳ぎたい 02 泳ぎたくない 03 どちらともいえない
17. 先生の説明や指導について評価してください
01 説明及び実技指導とも良かった
02 説明は良かったが、実技指導はあまり良くなかった
03 どちらともいえない
04 説明は不十分だったが、実技指導は良かった
05 説明及び実技指導とも不十分だった
18. 臨海実習に参加して、問題意識及び技能習得を自己評価してください
01 指導者になるための問題意識及び技能とも十分習得できたので、成績=A(優)
02 ある程度は習得できたので、成績=B(良)
03 問題意識は強かったが技能の習得がやや不十分だったので、成績=C(可)
04 問題意識及び技能習得ともに不十分だったので、成績=D(不可)
05 よくわからない
19. 臨海実習で環境教育・環境学習プログラムがあれば参加したいですか
01 ぜひ参加したい 02 参加したくない 03 どちらともいえない
20. 経験を伝えたいと思いますか
01 とても伝えたい 02 まあまあ伝えたい 03 どちらともいえない 04 あまり伝えたくない
05 まったく伝えたくない
21. 臨海実習をより楽しく・より良くするために何か提案することがあれば、簡単に書いてください

ご協力ありがとうございました。